

# 「サッカー社会学」の誕生

—H・F・ムアハウス氏の所説を中心に—

内 海 和 雄

はじめに

① サッカーワールドカップはオリンピックを凌いで、世界最大のスポーツイベントであり、二〇〇二年には日本（韓国と共催）でも開催される。またサッカーは世界中に最も広く普及したスポーツ種目であり、それぞれの国におけるサッカーの在り方も多様である。それだけにサッカーと社会との関連の研究、広義に「サッカー社会学」と呼称するが、それはスポーツの普及の為に止まらず、国際理解等にとっても多大な成果を内包する。

② この度、スコットランド・グラスゴー大学社会学部「ヨーロッパ日本社会科学プロジェクト」の一環として、同学部上級講師H・F・ムアハウス氏と一橋大

学社会学部スポーツ社会学講座の有志を中心とするグループとの間で共同研究「サッカー社会学」が具体化しつつある。

③ サッカーの発祥国イングランドと共に古い歴史と伝統を有するスコットランドやヨーロッパのサッカー「先進国」と「後進国」である日本の共同研究は、その研究水準において日本側にとって多くのハンディキャップが予想されるが、サッカーの世界史的な発展、世界的な普及を考えれば、「サッカー社会学」の設立自体はむしろ遅きに失した感もある。

とはいえ、日本での社会学的なサッカー研究が相対的に遅れている現段階では、先ず、スコットランドサッカー研究者として国際的にも高く評価されているムアハウ

ス氏の研究を素材にしながら、「サッカー社会学」の概略を把握することが先行されるべきであると考える。(本研究は巻末に示す氏の論文と一九九九年九月末の一橋大学での講演等を資料としている。)

## I ムアハウス氏とスコットランド

### 1 ムアハウス氏の履歴

一九四二年にロンドンで生まれ約三〇年間過ごす。レスター大学で社会学を専攻し、ロンドン大学で修士を修め、自動車協会の管理者を勤めた後、学究の道に入った。八〇年代以降、ほぼスコットランドのサッカー問題を集中的に研究している。氏の研究領域は自身の分類によれば大きく「プロサッカー問題」と「文化産業」である。ここでの検討はもっぱら前者のサッカー領域のみであるが、後者の文化産業の視点もサッカークラブやリーグの分析に生かされている。

### 2 スコットランドの「特殊性」

氏の研究領域をより詳細に分析する前に、スコットランドについて少し触れておきたい。

### (I) イギリス(UK)の特殊性とFIFA

イギリスといっても、それはイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの四地域(Nations)から構成され、連合王国(UK: United Kingdom)という名称が使われる。そして北アイルランドを除いた場合の三地域はブリテン(Britain)である。さて、このイギリス(UK)は一State(つまり、バスポートでは先の四地域のいずれもがUKの国籍を持つ)でありながら、サッカーやラグビー等のスポーツでは四 Nations(国)として扱われている。これはイギリス内での「国際組織」(IFAB: International Football Association Board)の設立(一八八六年)が、一九〇四年のFIFA(国際サッカー協会: Federation Internationale de Football Association)の設立に先行していたことと力関係に依るものである。現在、イギリス内のサッカーリーグは、イングランド、スコットランド、ウェールズの三つである。

一九〇四年にイギリスに対抗してヨーロッパ七カ国(フランス、ベルギー、デンマーク、オランダ、スペイン、スウェーデン、スイス)によって設立されたFIFAが一九三〇年からワールドカップを開催した。今世紀

の前半はイギリスとFIFAの覇権争いが続いたが、ルール改正などにおけるイングランドの主導性があった。

(2) スコットランドとイングランド

スコットランドのようなイギリス内の貧しい国々ではスポーツが階級を越えた自己アイデンティティの手段であり、イングランドの傲慢さの中で、外国と伍して行けるスポーツが他にないスコットランドにとって、また歴史的にも優位に立ってきたサッカーは、特別に意義を持った国民文化(National Culture)であり、アイデンティティのクリエーターであった。(A-16, 17…巻末の文献番号を示す。以下同様)

だが、それは「イングランド帝国主義」に対する「文化的ナショナルリズム」として存在し、必ずしも政治的党派には結合しない。一九九二年の総選挙でスコットランド国民党の副党首はスコットランド人を「九〇分の愛国者」と酷評し、反イングランドが即スコットランド国民党への支持とは直結しないことに業を煮やした。(A-16)

スコットランドとイングランドの定期戦は一世紀以上続いたが、八〇年代に中止され、復活の兆しはない。と

いうのもスコットランドはむしろヨーロッパリーグ結成へ向いているからである。EUの労働力移動の自由化、その一環としてのボスマン判決(一九九五年)、そして大きなテレビ放映権料と絡んだ「ヨーロッパリーグ」結成の動向などが背後にあり、ヨーロッパは今、それぞれの国のリーグや協会は新たな危機、再編の中にある。

三〇〇年前にイングランドによって併合されて以来、スコットランドは従属状態に置かれ、富めるイングランドの陰で貧しい地位を与えられてきた。そのためスコットランドの独立を求める世論も、北アイルランドほどは強くないにせよ、現在に続いて来た。一九九九年五月、スコットランド議会が三〇〇年ぶりに復活し、スコットランドとしてのアイデンティティと独立化への動向は今後いっそう強まると考えられている。

II ムアハウス氏の研究領域

氏の研究領域は大きく「ナショナルリズム」「クラブ」「子どもと指導者」「サッカー研究」の四つに分けられる。その内容と方法の概要は以下のようなものである。

1 スコットランドのナショナルリズム

氏のスコットランドサッカー研究の前提は以下のようになる。

① サッカーはスコットランドを代表する唯一の大衆スポーツであり、「スコティッシュ・ユネス」を左右する国民文化となっている。

② だが、既存のイギリスサッカーの社会学的研究はイングランド中心になされており、スコットランドの研究は少ない。従って、もっとスコットランド独自の研究が必須である。

③ イングランドサッカー研究の方法は階級分析が中心だが、スコットランドの場合は民族問題、ナシヨナリズム問題を中心とする必要がある。

④ EU化政策の進行により、これまでのようにロンドン(イングランド)経由でなく、直接に大陸との交流が増える中で、サッカーもその有力な手段となってきた。

そうした中でスコットランドのサッカーが研究されるが、スコットランドの「団結の象徴でもあるサッカーの組織的特徴は次の五点に集約される。(A-12、17。A-2他では⑤を欠いた四点となっている。)

① グラスゴウの二大プロチーム(レーンジャーズとセ

ルティック)を中心に動いている。

② それらは民族的、宗教的分離と結びついて来た。レーンジャーズはプロテスタント系、セルティックはカトリック系かつアイルランド系である。

③ 経済的にはイングランドへの移籍料収入で支えられて来た。

④ イングランドそしてイングランド人への反感を強烈に持つ。

⑤ 人口比でサッカークラブが多い。(三八クラブ/五〇〇万人。イングランド+ウエールズでは九二クラブ/五〇〇〇万人)

また、スコットランドのクラブを三グループ化(A-13)すると以下のようになり、これらで四部制リーグを形成している。

- ・ 上位クラブ (二、レーンジャーズ、セルティック)
- ・ 中位クラブ (八、アバディーン、ダンディ・ユナイテッド、ダンディ、ハーツ、ハイバーニアン、マザーウェル、セントジョージンストン、セントミッレン)

・ 低位クラブ (二八、その他ハイランド地方で重要な

多様な準プロクラブ。

以上のようなスコットランドサッカーの特徴とその研究の前提の上にムアハウス氏のサッカー研究がある。そしてスコットランドナショナルリズムをめぐる領域は以下の三つの領域で構成される。

(1) フーリガン

一九七〇年代から八〇年代はイングランドを中心とするサッカーフーリガンが国内のみならず国際問題化し、その原因把握の活発な研究が行われた。概要は、ローカルな労働者階級のサポーターとの密接な関係にあったクラブが戦後の社会の豊かさの中でクラブ自体が次第にブルジョア化し、自分たちとは乖離して行くことへの反感として、あるいは旧い応援形態（野次、怒号、歌等）の維持として、そのアイデンティティとして、背後にある失業者の増大とその不満と結合して述べられる。あるいは近代社会の民主主義化に伴い男性性 (Masculinity) の発現場所が減少する中で、サポーター集団がその機能を維持し、フーリガン化するというものもある。それらを踏まえた上で、ムアハウス氏はイングランドフーリガン研究の弱点として以下の四点を上げている。

① フーリガンたち主観の過大評価

② 他者の研究（特にスコットランド）を参考としない  
③ 文化間の比較的視点が弱い

④ 他分野の研究（例えば社会階層の複雑さ等）を無視する傾向にある。(A-11)

氏はフーリガンには三つのパターンがあるという。

「バカ騒ぎ」のレベル、「ゲーム中断のためにピッチに侵入する」レベル、第三は警官も含めた大規模な喧嘩そして時には大惨事のレベルである。スコットランドのサポーターはほとんど第三には加わらず、従って、イングランドフーリガンの意味する第三はスコットランドには該当しない。(A-16) また、八五年の大惨事以降、大陸から閉め出されているイングランドが孤立を恐れて、マスコミを動員しながらスコットランドも巻き添えにしていくという警戒心もある。

また、スコットランドの実情をほとんど知らないで、あるいは無視してイングランドリイギリスとして論じるイングランド研究者の「イングランド帝国主義」への反発である。

(2) 民族・宗教問題

グラスゴーという一つの都市に本拠を置く二大チーム、つまりレンジャーズとセルティックは、スコットランドが抱える民族問題と宗教問題を典型的に示している。現在では比較的落ち着いているが、歴史的には両者間でもかなりの抗争もあった。一九八六年にレンジャーズはプロテスタント系選手の純粹採用を変更し、カソリックの優秀な選手と契約した。これはEU化を意識しての、政策の大変換である。(A-3)

(3) スコットランド(対イングランド)

また、対イングランド戦になるとこの両者はスコットランド統一として一致団結する。スコットランドアイデンティティはスコティッシュネスはイングリッシュネスはブリティッシュネスという「帝国主義的」図式への対抗である。両「国」の歴史的経緯を内包した大きな問題が、文化的ナショナルリズムとしてサッカーで噴出する。

一〇〇年近い間ロンドンのウェンブリースタジアムで二年毎に行われてきた両国対抗戦は、スコットランドから数万人(女性も含む)がいろいろな交通手段を使って馳せ参じた。彼らのすべてが当該試合を見ることができたわけではなく、「周遊旅行者」として女性の多くはロン

ドンでの買い物や見物を楽しみ、男性の多くも当該以外の試合を見たり、夜のロンドンのパブを「占拠」したりした。このウェンブリー行きのために「ウェンブリー貯金」も生まれるなど、一大イベント化、大衆文化化した。(A-5、6)これは特に戦間期のレクリエーションの普及に伴った現象である。そして戦後の豊かさの中で、金曜日の夜からロンドンへというように、旅は長くなつた。その後は飛行機組も増えた。

(4) スコットランド(EUとの関連)

最近ではスコットランドのチームにも大陸、特にオランダやドイツからのサッカー選手が増加している。

レンジャーズサポーターへの調査(A-17、一九九四年)によれば、「ヨーロッパリーグ結成へ賛成」は五〇・二%、「スコットランドにも残る事を条件に賛成」は四一・二%で、両者合わせて九一%と圧倒的であり、それとの関わりで「レンジャーズでプレーできる『外国人』に何らかの制限が必要か」では「いいえ」の八七・七%が「はい」の一・二・〇%を大きく引き離している。この結果は、これまで民族的にも宗教的にも閉鎖的であったスコットランドのサッカーが、EU化の中で大

大きく変化を来していることの反映であり、サポーターたちの中にも大きな変動が伺える。(A-20)

## 2 クラブ問題

### (1) サポーター問題

スコットランドにおけるクラブとサポーターの関係はイングランドのそれよりもより緊密だと言われる。ムアハウス氏がサポーターそれ自体について研究したのは(B-2, A-15)である。前者ではレーンジャーズのフランチャイズであるアイブロックスタジアムで当日観戦に来たサポーターに封入りの調査用紙を渡し、郵送で返送して貰った。

二五〜四〇歳代が四六・九%で、全体の六四・八%は既婚者、六・八%が女性、九九・一%が白人、完全雇用者は七五・八%である。構成は中産階級が多く必ずしも労働者階級とは限らない。これは製造業の減少というグラスゴーの産業構造の変化を反映したものである。スタジアム内の座席と経済的階層差は歴然としている。サポーター歴は一〇年以上が七二・一%(二〇年以上は五一%)である。観客動員数は八〇年代には一二、〇〇〇人台に落ちたが、九〇年代には四三、三〇〇人台を維持し

ている。これはレーンジャーズが再び強くなったからである。シーズンチケット販売数が多くなり経営的には安定してきたが、その分それを買えない若者が入場できなくなっているとの懸念もある。

試合当日のスタジアムでの行動を見ると、「試合直前の一〜三〇分前に到着」が三五・三%であり、また約半数は「座席に直行」する。その他の半数は「飲食したり、友人と会ったり」である。フリーガンは沈静化したと考えている。またスタジアムの変化として、「雰囲気 が低下した」と考える人が七一・八%もいる。その理由として全席座席制により「一緒に来た人と横で観戦できない」とか「立ち見席の消失、旗、トランペット、ドラムなどの応援の禁止」そして「スタジアムの形態」にも意見は及んでいる。また改善点として「ハーフタイム時の飲食販売をスムーズに」などがある。最近ではサポーターの知識も国際化し、彼らの意見をもっと採り入れることの必要性が強調されている。またレーンジャーズのヨーロッパリーグ進出について九八・六%の人が何らかの形で賛成している。

各クラブは公認の機関誌を発行しているが、若干のサ

ポーターが独自に発行するファンジンズ (Fanzines) は、むしろクラブとは距離を置きながら、またサッカーサポーター協会 (FSA: Football Supporters' Association) と同様に、「サポーターの声を文字化」「スペクテーターの要求を保護」「商業主義によるクラブの独占への反対」を掲げており、サッカーの大衆的文化論争を真面目に提起している。それ故にファンジンズの分析はサポーター文化を把握する上で不可避な対象である。特にここではいくつかあるファンジンズのうち、レーンジャーズ (L) 「Follow, Follow (FF)」とセルティックの「Not the View (NTV)」を対象としている。両ファンジンズともにそれぞれのクラブカラーを出し、相手クラブを批判する記事が主要な内容である。そのうち、宗派性 (Sectarianism: プロテスタントとカソリックの宗派対立) は大きく、FFから見ると、セルティックの中にある IRA (Irish Republic Army) への支持が批判対象となる。一方、NTVから見ると、スコットランドのマスコミは全体としてプロテスタント的であり、セルティック、カソリックには批判的であると批判している。しかし両者共に、黒人選手への人種差別は自制しようと

呼び掛けている。

かつてのような応援形態、つまり派手に謳い、吼えるようなものは余り好まれなくなっている。それはサポーターの階層が大きく変化し、中産階級化していること、家族連れが増えていることなどがある。しかしファンジンズの編集主体は労働者階級的で、この点では伝統的な応援形態を擁護する傾向にある。また、セルティックの一部による株式保有に対する公開化やチケット代などのクラブ経営改善を迫るものもある。

ファンジンズの全体的傾向は、「対立的・過激・包括的」というよりも、「イギリス労働者階級の本質を反映して適応的・防衛的・地域的」である。また、その視野は余り広くなく、影響力は限られている。そして権力に対しては対抗的だが、サッカーに対しては文化遺産として擁護的である。

(2) プレーヤーの移籍問題 (ボスマン判決を含む) 移籍問題は古くて新しい問題である。下位クラブから上位クラブへの移籍に伴う移籍料によって前者の経営が成り立ってきた。これは一九世紀からの体制であり、スコットランドとイングランドの間でも存在する。プレ

ヤーはクラブの所有物と見なされ、移籍する場合の移籍料は元のクラブの収入となり、本人には僅少しか入らない。これでは自由契約ではなく「奴隷契約」である。

(A-13) しかしボスマン判決はプレーヤーの個人としての地位の確立であり、移籍料はプレーヤー個人に支払われることになる。また、「労働力移動の自由化」はこれまで一チームの外国人プレーヤー登録三人という規定はEU加盟国のプレーヤーには適応されず、これによってヨーロッパのサッカー界はプレーヤーのリクルートとその養成体制をも含めて、現在大きな転換期にある。

だが、これら移籍問題に関する研究はこれまで極めて少なく、ボスマン訴訟の中でヨーロッパサッカー協会(UFFA)やイギリスサッカー協会(FA)が主張した「サッカーは特別で、他の職業一般と同列には対応できない」という現行制度擁護の意見に対して、EUの欧州委員会(European Commission)さえ、十分には対応し切れてこなかった。

ムアハウス氏は一九九三年の調査(A-13、クラブ側が資料提供を好まない等の非協力の中)で次の点を明らかにした。すなわち、一〇〇年間続いたスコットランド

からイングランドへの優秀なプレーヤーの移籍は一九八六年のレーンジャーズの方針転換以降、大きく変化し、上位二大クラブは、移籍収入はマイナスであり、イングランドへのプレーヤーの放出よりもむしろそこからの購入に転換しており、外国との関連では中位、下位クラブも含め主にオランダからも購入している、ということである。こうして従来の「常識」は大きく修正されることになった。

こうして激動するヨーロッパサッカーの中で、ムアハウス氏は以下の五点が新たな課題となっていることを指摘する。①過去の移籍システムの経済効果への誤解を解くこと、②若きプレーヤーの養成、③プレーヤー協会の役割、④ヨーロッパ共通の契約基準、⑤代理人の役割の増大、である。

移籍システムはクラブの経済的平等化の唯一の手段であったが、ヨーロッパのサッカーも変化し、放映権料、スポンサー、宣伝、フィールド外での活動も多くなり、クラブ収入を支えている。それ故、こうした新たな収入資源の発展の中で、一九世紀に設けられた移籍料方式を「生命線」とするのははや不合理となっている。(A-

19)

(3) クラブ経営・リーグ経営

財政分析は、クラブやリーグの存続、その在り方にとって根本的な問題であるが、クラブやリーグ側の抵抗もあり、容易ではない。指摘はされるが現実には余り進んでいなかったこの研究を、ムアハウス氏は一歩進めた。

これが文献(A-4)であり、一九八六年である。ここではスコットランドとイングランドの各二クラブを対象に、その入場者数、クラブ運営費の単純な比較研究を行った。レインジャーズはイングランドトップチームを凌駕する経営能力を持つが、一方、スコットランドクラブの多くがイングランドへの移籍料を基礎に運営している。この研究はその後九〇年代の移籍料問題、クラブやリーグ経営問題研究の前提となり、それはやがて、前項で見たように九三年(A-13)以降の移籍料分析とスコットランドと他地域(イングランドを含め大陸の諸外国も含む)との移籍関係の分析へと発展した。

リーグ全体の維持のためには構成クラブ間での「試合結果の不確実性」つまりチーム力の均衡化による勝負のバランスの維持、そのための収入の再配分が必須である。

リーグの歴史はその配分をめぐる戦いの歴史でもあった。

①リーグ戦入場料の再配分―「すべての入場料は一括に留保され、各クラブに均等に配分するという」一八八八年の協会案は否決され、ホームクラブが確保し、ピジターに某かの保障をするという案が採択された。戦間期には、入場料の二〇%をピジターに、一%の徴収金を協会に(一九四九年からは四%)、後はホームクラブの収入となった。

一九六四/五年には全入場料の四五%を上位一五クラブで挙げた。九二年以前、留保金からの補助がクラブの収入に占める割合は一部リーグでは二%、四部リーグでは一三%であったが、これを下位クラブに均等に配分するのはクラブのためにならないとの批判も出ていた中で、一九九二年の「プレミアリーグ」の発足となった。

②リーグ戦以外の試合の設定による収入源の増加―これまでリーグの試合の他に、FA Cup & League Cupを設けて大会の機会を拡大し、収入源を増やしてきた。

③他の財源の確保(サッカーくじ、TV放映権料、スポンサー等)―サッカーくじ会社からの配付金は一九八一/二年には一〇〇万ポンドであった。その使用用途は

スタジアム改修や警備費へ回された。しかしその後、サッカーくじからの収入の使い道が曖昧化した。

TV放映権料は九〇年代に入って年々上昇し、プレミアリーグの国内収入の内の三一%を占めるようになった。因みにウィンブルドンテニスでは五二%、アメリカカンファットボールでは放映権料は六四%を占め、プレーヤーのゼッケンやピッチ内の宣伝板の設置など、スポンサー料は最近増加している。

以上の検討から、再配分システムはあまり有効に機能していないこと、八〇年代辺りから協会（FA）もクラブの営利化を認め、独自の収入を認めている。これは一方で裕福なクラブはより裕福に、貧困なクラブはより貧困になることを容易にした。こうした中で、ヨーロッパのクラブもアメリカ化を避けることができず、プレーヤーの権利がより強く主張されるメカニズムが継続的に発展しつつある。

#### ④ プレミアリーグの発足

旧ファーストディヴィジョンを中心にプレミアリーグが一九九二年に発足した。この過程を詳細に分析したのが文献（B-10）である。八〇年代のサッチャリズムに

おける営利化政策による政治経済的影響とも絡め、サッカー界の変動を分析した。EU化を迫られている裕福なクラブにとって、弱小クラブとの共同歩調は足枷と感じていた。一方でテレビマネーの独占化が絡んでいた。しかし発足の過程で表向きの理由として掲げられた「イングランド全体のレベルアップ」「若手の養成」等は放置され、むしろ外国プレーヤー、あるいはヨーロッパ全体からの若手の青田刈りによる買い集めが問題化している。

#### 3 子ども、その指導者問題

##### (1) 子どもサッカークラブ（実態調査）

一九九二年にスコットランド・スポーツカウンシルはプロクラブによるサッカーの若手プレーヤー養成研究プロジェクトを発足させた。この間のスコットランドサッカーの弱体化に危機感を感じ、公共機関としての研究対象としたものである。また、欧州裁判所におけるボスマン訴訟後の動向を見据えての措置である。

今回の調査は二〇クラブを対象として「それぞれの主要な課題は何か」「どんなトレーニングをしているか」などの調査とともに、養成された若者、プレーヤーへのインタビューを計画した。ここでもクラブの非協力に直

面したが、一定の傾向は出せた。(A-20)

一九八五年の教員スト(サッチャー政権の教育条件低下政策に抗議したもの)により、六〇%の教師が部活動から撤退した。それによりスコットランドにおける子どもスポーツ、特にサッカーの中心であった部活動が壊滅的に減少した。(内海和雄『部活動改革——生徒主体への道』不味堂出版、一九九八年)その間隙を縫って、地域の子どもスポーツクラブが進出したが、現状の問題点は以下のようなものである。

①子どもたちは室内ゲームへ大きく傾斜し、外遊びが減り、サッカーが無くなった、②施設の不足、特に四あるいは七サイドサッカーピッチの不足、③部活動への期待の新たな高まり、④若手養成システムの必要、⑤親の過熱、である。

子どもの生活の変化やサッカークラブの弊害が指摘される一方で、それらのクラブが子どもへのサッカーを提供していることも現実である。スコットランドのサッカーの沈滞化対策は底辺拡大、特に子どもたちのサッカーへの参加促進であるが、北欧に比べて二〇〜三〇年遅れているといわれ、早急な研究の必要性が指摘されている。

(2) 子どもサッカークラブ指導者

実態調査に基づき(A-18)、コーチの実情の問題点が指摘される。コーチの職業はホワイトカラーや熟練工が多く、コーチ歴八年、週の指導時間は九・七時間が平均的な像であり、運営上かなりポケットマネーを支出している。七〇%以上がSFA (Scottish Football Association) の各種レベルのコーチ資格を持っている。

彼らが嘆く問題点は「自分の子しか見えない父母の態度」や「大陸に対して遅れている施設不足」である。また「SFAの物心両面での援助の少なさ」にも不満は高い。そして子どもサッカークラブの競争が激しくなるにつれて、上級クラブからの子どもの引き抜きが激化し、着実に指導できないとの不満もある。九〇%のコーチが、上級クラブはもっとジュニアのサッカー指導にも関心を持ち、助言的役割を果たして欲しいと願っている。七七%のコーチはクラブのサッカーが余りにも競争的で試合数が多すぎると考えている。

#### 4 サッカー研究

九〇年代に出版されたプロサッカーに関する六冊の本をレビューしたものが(A-21)である。先進国でのプ

ロサッカーは現在激動の中にある。サッカーへの援助形態、労働市場、そのグローバルイゼーション、アメリカや日本でのトップの奨励、裁判係争の激増、ペイテレビ問題等々である。「イギリスのサッカーに関する社会学はこの間暴力問題に偏りすぎ、方法論の厳しさに欠けている。社会学に基礎を置いたサッカー分析」の伝統は問題状況に対応しきれていない。今後、多国籍化したサッカー界の動向に対応した研究が必要である。特に文化交流研究を盛り込みながら、イングランドサッカーについて染み込んだ「理論」の否定的な意味を払拭しなければならぬ。それと併行して、子どもサッカー、地域サッカー、プロサッカー、審判、コーチ、サッカー機関（クラブ、リーグ等）、クラブ経営等の研究が必須である。イングランドサッカーが労働者階級の視点での分析を主とすれば、スコットランドのサッカーは民族問題であり、宗教問題である、つまりマルクスではなくウェーバーだとムアハウス氏は言う。(A-5他)だが、スコットランドサッカーも労働者階級文化であることは(A-2)以外でも再三承認していることであり、直截にマルクス否定、ウェーバー肯定では短絡過ぎるのではないか。

また、氏の「サッカー社会学」を直接的に論じた論文は(B-11)である。この三〇年間にヨーロッパでのサッカーの社会学は以下の一〇領域をカバーしてきた。

① 競技の歴史と統計情報—サッカー史研究は相対的に多く、またクラブやリーグの統計資料は一九八〇年代から報告され始めている。この点はいっそう充実させる必要がある。

② サッカーをめぐる暴力問題—イギリスの社会学的研究がここに集中しすぎてきた傾向があり、行き詰まりの状態である。新たな方法論が求められている。

③ アイデンティティ—多民族国家、移籍の多さなどの中で、民族問題、宗教問題も絡んでプレーヤーやサポーターのアイデンティティ問題は現代社会の大きな課題である。特にナショナルリズムとサッカーの関係も大きなテーマである。

④ 観衆—サポーターの社会背景、民族学的研究、心理的研究が為されてきており、フーリガン研究に押されて無視されてきた一般観衆の研究—視野が広がっている。

⑤ 政治経済—近年の「サッカー産業」の進展は著しい。経営、商業化、メディアとの関連、増加する裁判係争。

それらを対象とする研究への期待も大きい。

⑤までと比べるとこれ以降の項目の比重はサッカー社会学の領域として、ムアハウス氏の中では小さくなるが、重要なテーマである。

⑥移民問題——一九九五年のボスマン判決によりEU内の労働力移動の自由がサッカー界にも影響し、ヨーロッパサッカー界が今大きな変動を迎えている中で、移民問題ばかりでなく、プレーヤーの人権、移民問題の抱える諸問題が研究対象となっている。(ボスマン判決とそれによるプレーヤーの移籍料の高騰は、それ以降の日本のJリーグへの移籍を激減させるなど、日本にも直結されている。)

⑦若者の養成——上記の中で、クラブとして資金力のあるヨーロッパのクラブによる世界中からの若年層の青田狩りが進んでいる。一方、先進国での子どもの文化の多様化と外遊びの減少、受験体制化などの影響で、優秀なプレーヤーの自然発生の条件は狭まっており、国家としても若年層の養成が大きな課題となっている。

さらに、⑧女性とサッカー、⑨労働としてのサッカー、労働者としてのプレーヤー、⑩博物館、芸術としてのサ

ッカー等があるが、氏自身はあまり研究していない。

### III ムアハウス氏の総括

以上のムアハウス氏の研究からスコットランドサッカーについて何が明らかになったのか、「サッカー社会学」として、サッカーが社会に何をもたらしたのか、また社会がサッカーに何をもたらしたのだろうか。

①ナショナルリズムとの関連で言えば、サッカーが単なる一つのスポーツ種目に止まらず、スコットランドにおける民族、宗教の一体感として、あるいは対イングランド、対ヨーロッパ諸国での「文化ナショナルリズム」として、アイデンティティとしてのスコティッシュネスの手段あるいはその主要な担い手として機能している。

②クラブとの関連で言えば、移籍システムが歴史的に果たしてきた機能が崩壊しつつある。テレビ放映やスポンサーシップの発展によって、あるいはEU化の中の「労働力移動の自由化」はボスマン判決によりサッカー界といえども例外であることは許されなくなった。また、移籍システム自体はプレーヤー自身にとってみれば自由契約でなく「奴隷契約」であり、そうしたものの民主主

義化も不可避であることが述べられた。と同時に、リーグ活性化と利潤再配分の在り方も検討されている。裕福なクラブはその利潤を容易に放出しようとはしない。この点で、アメリカの諸スポーツにおける平等分配方法も勘案される。また、サポーターの在り方は、その国のサッカーと社会の関係を直接的に示す指標であるが、意識調査とファンジンズの検討から彼らの実態が分析された。

③子どもサッカーの実態とそれに関わるコーチ問題は、スコットランドの国際的な競技力低下を背景に注目された。子どもたちの生活現実は一進退諸国の一般的傾向として、外遊びの減少、室内遊び化が指摘される。サッカー場面ではスコットランドも施設不足、親のエゴ化、指導者問題など、山積した課題に囲まれている。

④九〇年代のサッカー研究の分析は、イングリッシュネス・ブリティッシュネスへの批判、スコットランドの正当な位置付けが主要な対象となる。

#### IV 「サッカー社会学」の構想

これまでの全体を通して、ムアハウス氏の「サッカー社会学」は一〇の領域として提起されている。もちろん

各領域における課題論や方法論はさらに厳しく検討されなければならない。例えば、自治体の政策、「スポーツ・フォー・オール」政策はいかに為されているのか。特にスコットランドの場合、イングランドよりも自治体のスポーツ提供の権限は強力であったはずであるが、そうした政策分析は必須であろう。氏自身はスポーツの大衆化を強調するが、プロプレーヤーの養成においても国や自治体の公共的な、手厚い「スポーツ・フォー・オール」政策が背後に必須となっているのが世界的傾向ではないだろうか。この点で、自治体等が高度化、大衆化の両面で行うサッカー普及施策の目的、分析は「サッカー社会学」の重要な構成領域となるであろう。

そして「サッカー社会学」としての体系化とは何か。氏のこれまでの作業はまさに、一人の社会学的なサッカー研究者として、実に多くの領域を深くカバーし、社会的研究者として比類ないものである。それだけにその全体系を本人がいかに考えているか、そして考えて行くかは、大いに関心のあるところである。

ともあれ、「サッカー社会学」の体系化の上で、いかなる目的、内容、方法に依るかが問われる。この場合関

連して「社会学とは何か」「スポーツ社会学とは何か」「スポーツとは何か」も問われるであろう。

このムラハウス氏の「サッカー社会学」に照らしてみるとき、彼も期待し、そして我々自身の直接的対象である日本の「サッカー社会学」はどのように来ているのだろうか。それは次稿の課題である。

注 引用、参照は以下の論文集中に従った。

A : Academic Articles

- A—1 : 'Understanding and explaining crowd behavior at football matches in Scotland', being section 2 of *Crowd Behavior at Football Matches: A Study in Scotland*, a report by the Tourism and Recreation Unit of the University of Edinburgh, Autumn 1983, pp. 11-31.
- A—2 : 'Professional Football and Working Class Culture: English Theories and Scottish Evidence', *Sociological Renew*, Vol. 32, No. 2, May 1984, pp. 285-315.
- A—3 : 'Repressed Nationalism and Professional Football', in J. Mangan & R. Small (eds.), *Sport, Culture, Society*, E. & F. Spon, 1986, pp. 52-60.
- A—4 : 'It's Goals That Count? Football Finance and Football Subcultures', *Sociology of Sport Journal*, (American), Vol. 3, No. 3, September 1987, pp. 242-260.
- A—5 : 'Scotland Against England: Football and Popular Culture', *International Journal of Sport History*, Vol. 4, No. 2, September 1987, pp. 189-202.
- A—6 : 'We're Off To Wembley! The History of a Scottish Event and the Sociology of Football Hooliganism', in D. McCrone et al. (eds.), *The Making of Scotland*, Edinburgh University Press, 1989, pp. 207-227.
- A—7 : 'One State, Several Countries: Soccer and Identities in a 'United Kingdom', Colloquium Paper, European University Institute, Florence Italy, October 1989, pp. 1-14.
- A—8 : 'We're Off To Wembley!' (revised version), *Edinburgh Review*, Autumn 1989, pp. 66-75.
- A—9 : 'Shooting Stars: Footballers as Working Class Culture in Twentieth-Century Scotland', in R. Holt (ed.), *Sport and the Working Class in Modern Britain*, Manchester University Press, 1990, pp. 179-197.
- A—10 : *On the Periphery: Europe Viewed from East Sirlingshire, Forfar Athletic and Queen of the South*, Colloquium Paper, European University Institute, Florence Italy, May 1991, pp. 1-15.
- A—11 : 'Football Hooligans: Old Bottle, New Wines?', *Sociological Review*, Vol. 39, No. 3, August 1991, pp. 489-502.
- A—12 : 'On the Periphery: Scotland, Scottish Football,

- and the New Europe', in J. Williams and S. Wagg (eds.), *British Football and Social Change*, Leicester University Press, 1991, pp. 201-219.
- ▲—㉓: *The Economic Effects of the Transfer System in Professional Football: Evidence from Scotland 1982-1991*, a research paper no. 6, Training and Employment Research Unit, University of Glasgow, September 1993, pp. 1-22.
- ▲—㉔: 'Blue Bonnets Over the Border: Scotland and the Migration of Football Talent', in J. Bale and J. Maguire (eds.), *Worlds Apart: Sport Labour Migration in the Global Arena*, Frank Cass, 1994, pp. 78-96.
- ▲—㉕: 'From Zines Like These? Fanzines, Tradition and Identity in Scottish Football', in G. Jarvie and G. Walker (eds.), *Scottish Sport in the Making of the Nation: Ninety-Minute Patriots?*, Leicester University Press, 1994, pp. 173-194.
- ▲—㉖: 'One State, Several Countries: Soccer and Nationality in a 'United' Kingdom', reprinted in J. A. Mannigan (ed.), *Tribal Identities: Nationalism, Europe, Sport*, Frank Cass, 1996, pp. 55-74.
- ▲—㉗: 'Scotland, Football and Identities: the National team and club sides', in S. Gehrman (ed.), *Football and Regional Identity in Europe*, Lit Verlag, 1997, pp. 181-203.
- ▲—㉘: 'Coaches of boys club teams throughout Scotland', Scottish Football's Independent Review Commission, October 1997.
- ▲—㉙: 'Football post-Bosman: the real issues', revised version of a paper given at the conference "Player Market Regulation in Professional Team Sports", University of Neuchâtel, Switzerland, October 1997.
- ▲—㉚: *The Training and Development of Young Footballers in Scotland*, a research study published by the Scottish Sports Council, 1997, pp. 1-54.
- ▲—㉛: 'Ending Traditions: Football and the Study of Football in the 1990s', review essay, *International Journal of the History of Sport*, Vol. 15, 1998.
- ▲—㉜: 'Football Post-Bosman: The Real Issues', in S. Kessenne and C. Jeanrenaud (eds.), *Competition Policy in Professional Sport: Europe after the Bosman Case*, Standaard Uitgeverij, (Antwerp), 1999.
- ▲—㉝: 'The Economic Effects of the Traditional Transfer System in European Professional Football', to be published in *Occasional Papers in Football Studies*, 1999.
- ▲—㉞: *The History, Functioning and Consequences of Mechanisms to Redistribute Income Between Clubs in English Professional Football*, a paper for the International Conference of Sports Economists, University of Lim-

- ges, France, July 1999.
- Ⓔ : *Consultancy/Research Reports*
- Ⓔ—1 : *The Professional Footballer in Scotland and the 'Free Market' in Europe from 1993*, working paper 4, Edinburgh and Lothians 1992 Committee, 1991, pp. 1-29.
- Ⓔ—2 : 'A Survey of the Crowd at Rangers FC, Glasgow, Scotland' *Project on the crowd in the football stadium of Europe*, Research Unit in Leisure, Culture and Consumption, University of Glasgow, March 1995, pp. 1-51.
- Ⓔ—3 : *The Consequences for European Football of Ending the Traditional Transfer System and UEFA's 'Three Foreigner Rules'*, a report for The European Commission (Directorate General 5), September 1995, pp. 1-54.
- Ⓔ—4 : *Consultation Exercise 1 - Professional Players in Scotland (including the International Squad)*, report for Scottish Football's Independent Review Commission, January 1997, pp. 1-25.
- Ⓔ—5 : *The History and Functioning of Mechanisms for Redistributing Revenue between Clubs in English Professional Football since the War*, a report for the Office of Fair Trading, January 1997, pp. 1-28.
- Ⓔ—6 : *Consultation Exercise 2 - Fans and Amateur Players in Scotland (including Members of the SFA's Travel Club)*, a report for Scottish Football's Independent Review Commission, February 1997, pp. 1-35.
- Ⓔ—7 : *Consultation Exercise 3 - Coaches of Boy's Teams in Scotland*, a report for Scottish Football's Independent Review Commission, April 1997.
- Ⓔ—8 : *Detailed Comments on the Statement of the Premier League Concerning the Genesis of the PL; Financial Arrangements in the PL; and External Restrictions on Televising Football*, a report for the Office of Fair Trading, May 1997, pp. 1-43.
- Ⓔ—9 : *Extra Comments on the Statement of the Premier League Concerning the Concentration of Success in the Top Division; Financial Arrangements in the PL, and Investment in Stadium Re-building*, a report for the Office of Fair Trading, July 1997, pp. 1-23.
- Ⓔ—10 : *The Condition of English Football in the 1980s and the Creation of the FA Premier League*, a report for the Office of Fair Trading, September 1998, pp. 1-96.
- Ⓔ—11 : *Soccer Sociology: Scotland and Europe*, Lecture delivered at Hitotsubashi University and Ritsumeikan University, Japn, September/October 1999.